

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：18001  
 研究種目：基盤研究(C) (一般)  
 研究期間：2012～2016  
 課題番号：24530882  
 研究課題名(和文) 自閉症スペクトラム障害児の自己同一性の形成の解明と学齢期の関係発達の支援の開発  
  
 研究課題名(英文) The Formation of the self-identity of the Autism Spectrum child with Disabilities And Development of The Support Approach of The developmental Relationship with Others in the period of school age  
  
 研究代表者  
 浦崎 武 (URASAKI, Takeshi)  
  
 琉球大学・教育学部・教授  
  
 研究者番号：20331613  
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：自閉症スペクトラム障害児の他者との関係性に着眼しながら集団活動を通して他者との相互作用の「ズレ」に他者が気づき、自閉症スペクトラム障害児が他者に合わせてもらうことで他者との繋がっている感覚を育てる「関係発達の支援」の開発を行った。  
 この支援方法により、他者との「ズレ」に気づき、「ズレ」を修正するために自ら調整する相互作用の経験を積むことが、自己同一性の形成のプロセスに効果があると考えられた。

研究成果の概要(英文)：While focusing on relationship with others, Through group activity, Supporters notice differences in the interactions between autism spectrum children and others. And autism spectrum children adjust the interaction to supporters. The new support approach of the developmental relationship with others in the period of school age has been developed by this group activity.  
 Through this approach, I could think I had an influence good for formation of the self-identity of autism spectrum children.

研究分野：社会科学、心理学、教育学、医学、臨床心理学、特別支援教育学、臨床発達心理学、児童精神医学

キーワード：自閉症スペクトラム障害 関係発達の支援 自己同一性の形成 他者との関係性 集団支援と教育実践  
 直観的心理化 能動性と受動性 他者との相互調整

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 「自分はどうみられているか」、他者との違いが不安になる自閉症スペクトラム障害児の学齢期は発達的に重要な時期である。自閉症スペクトラム障害児への支援として社会適応のスキルの獲得を目的とする訓練は多く見られるが、障害の中核とされる「他者との関係性」の発達の課題を基盤とする「私とは何か」を問う、「自己同一性の形成」の解明に真正面から取り組む研究や学齢期の心理的安定を支援する方法の研究は極めて少ない。

(2) 友だちとの関係を作るためのスキルトレーニングは重要な支援法として発展を見せているが、自分自身の障害特性を「どのように受け止めるか」、そして「どのようにつきあっていくか」という根本的な心理的混乱の軽減に結び付く「自己同一性の発達の課題」に対するアプローチは極めて少ないのが現状である。

(3) 浦崎ら(2011)は学齢期の心理的安定をもたらす「他者との関係性」を基軸とする「関係発達の支援」を行ってきた。そして現在、支援体制の充実と複数の支援事例により「自己同一性の形成」の過程を整理する段階に研究が進んできた。

## 2. 研究の目的

(1) 自己同一性の解明には「他者との関係性の変容過程」の詳細な質的分析が必要であること、そのための「自閉症スペクトラム障害児の自己理解や他者理解の変容」について、他者との関係性を基盤とした支援による長期的で、ボトムアップ的な関係発達のエピソードを整理することや子どもの置かれた状況や文脈に沿った行動分析が必要であると考えてきた。

(2) 主流の支援のひとつとして挙げられる

ソーシャルスキルトレーニングは、ややもすれば How-to 的な指導的支援となり一方的に子どもたちの変化を求める訓練的な支援になりがちである。そのような支援は子どもたちの一面的な適応のための支援に留まってしまい「私とは何か」を問う自己同一性の揺らぎの解決、自己同一性の形成への支援に結び付かないものになってしまう恐れがある。

(3) 「関係発達の支援」はスキルトレーニングとは異なり双方向的な「関係性」による支援は支援者から彼らの困惑している内面に歩み寄りサポートする視点を有し、支援者が子どもたちといかに関わり、関わるかという「関係性のあり方」を考えていく「支援者の支援姿勢」を重要視する支援方法の開発である。幼児期特有の不安を解消する関係発達支援は開発されているが、自己同一性の形成の基礎となる学童期においては新たな取り組みとなる。

(4) そこで、「自己同一性の形成過程」の解明、「関係発達の支援」による学齢期の自閉症スペクトラム障害児への支援法や効果を詳細に検討し「学齢期の関係発達の支援法」の開発をすることを目的とした。

## 3. 研究の方法

(1) 自己同一性の形成過程の解明から、その過程を促進させる「学齢期の関係発達の支援方法」の開発へと一貫した研究の基盤を確立する。自己同一性の形成の解明は基礎研究として「他者との関係性の変容過程」の分析が必要であることから本研究計画では以下の～の研究項目に沿って並行して進める。

他者との関係性の形成過程を明らかにする：「他者との関係性の形成過程」を詳細に検討し明らかにする。そのため過去の実践事例の研究結果を整理する。

「他者との関係性の変容過程の段階性」を

明らかにする：過去の実践事例により他者との関係性の形成過程を整理し、検討することにより他者を要求すること、他者と関係性を形成すること、他者と相互作用すること等「他者との関係性の変容過程の段階性（変容過程のステージ）」を調べる。

「他者との関係性の変容過程の段階性」を実践を通して確認する：学齢期の自己同一性の形成の過程を解明する研究を進めるため「他者との関係性の変容過程の段階性」を実践により明らかにする。支援を受ける子どもたちにとって「支援者の存在がどのように変容していくのか」に焦点を当てる。

自己同一性の形成の過程を捉える：実践成果も踏まえて、そこで生じてくる「他者との関係性の形成」およびその段階性が与える影響を捉えるため自己理解や他者理解の発達に関する言動を抽出する。そして自己同一性との関連性について明らかにする。

自己同一性の形成過程に影響を与える要因を調べる：「他者との関係性の形成過程」およびその段階性で見られる自閉症スペクトラム障害児の特徴的行動や他者（支援者）との関わりを詳細に分析することで、自己理解や他者理解の変容にともなう自己同一性の形成過程を検討する。

「学齢期の関係発達の支援法」の具体的な支援について検討する：自己同一性の形成過程を解明し、「学齢期の関係発達の支援法」の具体的な支援について検討する。その現在、継続している個別支援、集団支援の取り組みによる実践的データを用いて具体的に支援法を検討する。

(2) 自己同一性の形成過程を解明し、「学齢期の関係発達の支援法」の具体的な支援について検討する。その現在、継続している個別支援、集団支援の取り組みによる実践的データを用いて具体的に支援法を検証する。また、～の一連の実践に基づいた研究課題

を遂行していくことで自己同一性の形成過程の解明から、その過程を促進させる「学齢期の関係発達の支援方法」までの一貫した研究の基盤を確立する。

#### 4. 研究成果

(1) 現在と過去が交差するフラッシュバックの現象やそれにとまなう不安の背景には自己存在基盤の脆弱さが見られた。「この日がすぐに来る」、「今と思っているとすぐに明日になる」、「今日もすぐに明日になってしまう」等、移り変わっていく「時間への意識」や自己存在基盤のゆらぎが生じる事例1の経過を通して、「他者との関係性の変容過程の段階」を検討した。事例2の検討により、「場の過ごし方」を柔軟に許容していく（受けとめていく）ことで、自ずと「他者との関係性の変容過程の段階性（ステージ）」への展開が生じていくことに着目した。そして、さらに「他者との関係性の変容過程」には他者との相互交流が生じてくる段階が展開された。その子どもたちの主体的で柔軟な「多様な過ごしのかたち」に委ねることで他者へと「向かう力」が生まれ、他者を意識し自己を意識する自己同一性の形成が展開されると考えられた。

(2) 事例3では、自分の型を押し通して過ごす段階、担当支援者との関係性を基盤として過ごす段階、他者と関わる共有経験を通して、他者との行動の「ズレ」に気づかされながら過ごす段階、企画に自分の型やファンタジーを重ねたり、複数の他者に合わせてもらったり、集団のルールに合わせて折り合いをつけて過ごす段階、他者と共有経験を積むことで他者を意識する＜受動性＞が触発され、他者の意図や感情の「ズレ」を意識しながら過ごす段階の展開が見られた。この経験こそ、内側の内実を作っていく経験となる「内側作り」のプロセスであると示唆された。

(3) 事例3の展開のなかで「他者と繋がっている感覚」の基盤には「他者と共有する経験」を積むことが必要であると考えられた。「他者と共有する経験」から得られる「他者と共有する感覚」が根付くことにより、「他者と共有できない感覚」も経験されると考えられたが、その「他者と共有できない感覚」から他者との相互作用の「ズレ」への気づきが生まれてきた。その「ズレ」に関する気づきの感覚が形成されるための支援が、直感的心理化への支援の基盤となると考えられた。「他者と繋がっている感覚」が育つことによって、他者との意図や感情の「ズレ」による満たされなさに敏感になるとともに「身体レベルの不全感や違和感」が生じやすくなった。「他者と共有する感覚」が他者との快の情動経験に繋がるものであれば、自ずと他者の意図や感情を意識し調整しようとする意欲が生まれてくると考えられた。

別府(2012)は、Damasio(1999)のソマティックマーカー仮説を取り上げ、身体記憶が直観的心理化の解明には重要な視点を提供していることを述べているが、「他者との共有する感覚」やその感覚による「共有のできなさ」による「身体レベルの不全感や違和感」の感覚が、直観的心理化への支援にとって重要なテーマとなると考えられる。

(4) 事例3で猪木のまねをしてピンタを支援者にした時も、その後、「痛かった?」と確認することが見られるようになった。他者が自分の行動をどのように受け止めたのかという他者の感覚を確認する行為として考えることができた。その後、事例3では支援者の名前を呼んで、「(名前を呼ばれると)嬉しいの?」と他者の感情を確認したりするようになった。このような他者意識の高まりにより、その頃から友だちの名前を

大きな声を呼ぶことが急激に増え始めた。他者の内側を理解しようと確認する行為が、他者との調整をする能力を高めていくと考えられる。以上のエピソードが示すように、関係発達の支援として「トータル支援」(以下、TSG)の名称で実施しているアプローチでは自然な状況や文脈の展開のなかで、他者へと「向かう力」や他者を「受けとめる力」を育み、他者の内側への理解を深めていく支援である。

(5) 本研究は学齢期の関係発達の支援の開発をめざしてきた。TSGは、高機能自閉症児にとって9歳、10歳が「心の理論」を獲得する重要な時期であることから幼児期と学齢期に主眼をおいた取組であるが、本研究は学齢期の支援開発をめざして実践事例を検討してきたが、事例4の検討を進めていくうえで、幼児期の自己の同一化について検証することが確認された。

幼児の事例4では、タオルとの関わりも自ずと主観的、内面的世界の人格的関わりから現実世界での関わりへと変容が見られた。その支援姿勢は物や人のもつ「受けとめる力」、「安心、安全を与える力」の機能を高め、対象へと「向かう力」の育ちを支えていたと考えられた。物や人へと「向かう力」が興味・感心のある対象に同一化することで、結果として幼児期から安心・安全の感覚を作っていると考えられた。興味・関心のある物に同一化することで自らの空想の世界を作り出しているようであった。学齢期へと繋がる早期の同一化がどのように変容していくかについての検討が今後、必要である。

また、事例1において学校での教育実践が与える影響の大きさが示唆された。特にTSGで重要視する「重要な他者」となる「担任」が1年ごとに変わることが現実を考慮すると、学校のなかで「安心できる関係性」を一貫して形成していくことがとても重要なテーマ

となると考える。今後、TSGの教育実践への展開を考えていくことが必要である。

(6)最後に、事例3ではC君の他者への「向かう力」を徹底して支援者が「受けとめていく」ことで、C君は他者に「受けとめられる」経験を続けていくことで、C君と支援者としての他者との安心できる心地よい関係性のもとで快の共有ができた。快の共有経験を継続させるためには、他者からの「向かう力」をC君が「受けとめる」ことが必要となっていた。その展開は自ずと「能動 受動」の相互作用が繰り返されることになっていく経過をたどることとなる。他者の働きかけを受け止める自閉症スペクトラム障害児が有する<受動性>が開かれていき、他者を意識し、自己を意識することが生まれてくる展開が自己同一性の形成の基盤として考えられた。

(7)自閉症スペクトラム障害児の関係発達の支援としてのTSGでは、①～⑤の展開が生じるために、担当ユニット制をとり「重要な他者との関係性の形成」に加え「時間」、「空間」等の緩やかな「支援構造」と「柔軟な支援姿勢」が重要であり、その安心できる支援者の存在と柔軟な支援構造が「魅力のある企画」による体験を効果的なものにする。自閉症スペクトラム障害児が集団の場で過ごし、自ずと「他者へと向かい」、「他者と関わり」、「能動 - 受動」のやりとりが展開されながら、自閉症スペクトラム障害児の自己同一性の形成がされていく。本研究により、その展開を支援する方法が関係発達の支援であり、その基盤を整えることができた。

(8)本研究の意義と今後の展望として特別な技術の獲得ではなく、「関係性の変容」を

捉えることによる子どもたちの自己同一性の形成を支えるための支援法の研究は子どもたちを支えていくための支援者の「支援姿勢」を明確化することに繋がる。つまりここで開発する支援法は、支援を行う上で、支援対象や状況に応じて支援者が自ら子どもへの関わり方(関係性)を変えていくことで子どもの変容を促す支援であり、支援者のその時々の「支援姿勢」が重要視される支援法である。従って支援を求める子どもと関わるための「支援姿勢」を軸とするため、対人関係に伴う支援を行う医療・福祉・教育等の多様な職種への応用が可能であり、非常に特色のある研究になると思われる。

(9)今後、自分自身の障害特性を「どのように受けとめるか」、そしてその障害特性と「どのようにつきあっていくか」という幼児期からの自己同一性の形成のプロセスを解明し「関係発達の支援」を開発することにより、自閉症スペクトラム障害児の心理的混乱を軽減させることが可能となり、かつ多様な職種に応用することで障害児の将来の安定した生活に寄与することができると考える。

自己同一性の形成は人格の形成である。学齢期における関係発達の支援について検討を重ねてきたが、その営みは学齢期の前段階、誕生から緩やかに始まり、幼児期からその課題が全面に生じ、学齢期における支援と教育実践において自閉症スペクトラム障害児の大きなテーマとなっていく。彼らの独特な同一化の世界を捉えて支援していくためにも、幼児期からの他者との関係発達の支援および教育実践へと繋がる実践と研究を積み上げていくことが必要である。

#### <引用文献>

- 別府哲(2012)心の理論の障害と支援 認知発達のアンバランスの発見とその支援  
本郷一夫編 金子書房 P31 - P56  
Damasio,A,R.(1999) The feeling of what

happens;Body and emotion in the making of consciousness. New York: Harcourt Brace & Company

浦崎武 (2011)、学齢期のアスペルガー症候群と関係発達の支援 そだちの科学 17号 P53 - P61

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計17件)

浦崎武、武田喜乃恵、自閉症スペクトラム障害児への関係発達の支援による集団支援と教育実践 - 「トータル支援」を通じた「過ごす力」と「向かう力」を育む支援論 - 、九州地区国立大学教育系・文系研究論文集、査読有、4巻(1.2).33、2017、1-14、

<http://id.nii.ac.jp/1066/00000296/>

浦崎武、武田喜乃恵、自閉症スペクトラム障害児の自己同一性の形成の解明と学齢期の関係発達の支援の開発 - 幼児期からの関係発達の支援および教育実践への展開に向けて - 、琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要、査読無、第8号、2017、35-56、

<http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp>

浦崎武、武田喜乃恵、学齢期の自閉症スペクトラム障害児への関係発達の支援と「自立活動」による教育実践 - 「ともに楽しむ」体験と「向かう力 - 受けとめる力」を育む「トータル支援」 - 、琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要、査読無、第7号、2016、133-152、  
<http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp>

浦崎武、武田喜乃恵、自閉症スペクトラム障害児の不安を<受けとめる力>を有する物の機能の変容と同一化への支援 - タオルを持ち歩く幼児の事例を通して - 、京都国際社会福祉センター紀要、査読無、30巻、2014、51-63、

<http://www.kiswec.com/kanko.html>

(その他13件)

[学会発表](計3件)

浦崎武、瀬底正栄、武田喜乃恵、崎濱朋子、障がいのある子どもたちと「ともに楽しむ」実践から育まれるもの - 関係性による「向かう力」と「受けとめる力」を育む「トータル支援」による実践、日本特殊教育学会、2016年9月17日、「朱鷺メッセ(新潟県・新潟市)」

浦崎武、瀬底正栄、武田喜乃恵、崎濱朋子、発達障がいのある子どもたちの「向かう力」を生む「トータル支援」 - 「ともに楽しむ」集団支援と教育実践から育まれる「関係性の力」、日本特殊教育学会、2015年9月20日、「東北大学(宮城県・仙台市)」  
(その他1件)

[図書](計2件)

浦崎武、武田喜乃恵、瀬底正栄、崎濱朋子、大城麻紀子、ミネルヴァ書房、発達障がい児の<向かう力>と<受けとめる力>を育む<ともに楽しむ>実践 - 沖縄での集団支援と学校教育 - 、2017、印刷中

浦崎武、武田喜乃恵、瀬底正栄、崎濱朋子、大城麻紀子、協同出版、発達障害のある子どもとともに楽しむ<トータル支援>と海を活かした教育実践 - 自立活動の授業実践と集団支援を通して<向かう力>を育む - 、2016、5 - 13、14-20、84-107

[その他]

琉球大学リポジトリ

<http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp>

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

浦崎 武 (URASAKI Takeshi)

琉球大学・教育学部・教授

研究者番号：20331613